

第125回山口西田読書会（前回124回10月8日のプロトコル）

参加者：唐露、谷、千葉、岡部、藤村、山本、桑原、岡田、田中、山口、佐野

1. テキスト要約（第3編第13章、第4編第1章第1段落）

第3編「善」第13章「完全なる善行」

第1段落では、善とは人格の発現であるが、その動機の極（至誠）と目的の頂点（人類一般の統一の発達）はいつでも一致するかの問題が提起される。ついで第2段落では純粹経験説に基づいて、動機と目的は相矛盾するものではないことが説明される。第3段落では両者が衝突する場合を考察する。第一の場合は行為が事実としては善であるが動機は善でない場合であるが、西田は動機が善でない行為を善行そのものでないとして全く問題としない。第二は、動機は善であるが事実上善でない場合であるが、至誠という語を正当に解するならば、そのようなことはほとんど事実でない、と事実によって否定する。そうして「我々の真摯なる要求」即ち「至誠」は「我々の作為したものではない、自然の事実である」と主張する。この善の「事実」は「真及び善において一般的要素を含むように」一般的である、誰でもそのように考えなければならないとする。人類最大の要求が現実となって働かない場合でも、要求（至誠）がないのではなく、蔽われているに過ぎない、真の自己を知ればそのことが分かる、そのように考える。第4段落では以上の結論を述べると共に、このような完全なる善行は誰にでもできなければならないものである、そのように言う。如何に小さい事業でも人類一味の愛情より働いている人はそのような善行をなしているのである。第5段落では善とは真の自己を知るというにつきるとして、それが神意と冥合することであり、それには主客合一の力を自得するのみであり、その力を得るのは我々の偽我を殺し尽して一たびこの世の慾より死して後蘇る外ないとする。それが宗教道徳美術の極意であり、それがキリスト教では再生、仏教では見性と言われるとされ、最後は「道徳上においてこのジョットの一回形を得ねばならぬ」と、「真の自己を知れ」という命令で第3編を閉じる。

第4編「宗教」第1章「宗教的要求」

第1段落

「宗教」編はいきなり「宗教的要求」から始まる。」宗教的要求が自己に起こって来る。それは「我々の自己がその相対的にして有限なることを覚知すると共に、絶対無限の力に統一してこれによりて永遠の真生命を得んと欲するの要求」とであるとされる。ここまででは要求の出所はハッキリしない。しかし「真正の宗教は自己の変換、生命の革新を求めるのである。キリストが『十字架をとりて我に従わざるものは我に協わざるものなり』といった様に」とあるところで、この要求の出所は「真正の宗教」であり、「キリスト」であることが判明する。そうして「一点なお自己を信ずるの念ある間は未だ真正の宗教心とはいわれぬのである」とされる。

2. 議論要約

1) 講読に先立ち、司会者から『善の研究』第3編に至るまでに西田には至誠にて悪事をなすことがないかについての煩悶を経験していることが『倫理学草案第二』のテキストをもとに紹介された。『善の研究』第3編における迷いのない書き方は「至誠」を徹底して「命令」と解することによって実現したものではないか、と言う示唆が述べられた。

2) 西田は「至誠をつくせ」と言うが、テロリストが「私は至誠を尽し、多くの人を殺したが、これは神意である」と主張した場合どうか、という問いが司会者から出された。至誠は人それぞれであるという意見が出されたが、統一力（至誠を尽せと言う命令）はあるが、それを判断して「私はこれを為すことで至誠を尽した」というのはすでに判断の領域であり、それに対しては「本当にそうか」という問い、したがって「至誠を尽せ」というさらなる命令が起り得ると言う反論が提出された。

3) 第3段落に「自然の事実」という記述があり、それが真、善、美における一般的要素（誰でも持っている）であることが述べられる件は、最晩年の『場所的論理と宗教的世界観』でも同様であり、そこでは「事実」は「心霊上の事実（『善の研究』では「心霊的経験の事実」）」とされて

いることが司会者から紹介された。

4) 「真摯なる要求」すなわち「至誠」が万人に共通のものであるなら、この世には悪はないのではないかとの質問に、テキスト第 2 段落で「元来世の中に悪というものはない」、「達観する時は世界は罪を持ちながらに美である」とされていることが指摘された。要するに「真の自己」を知る（達観する）ならば、そのことが分かるというのが第 3 段落末の「しかしかかる場合でも要求がないのではない、蔽われているのである、自己が真の自己を知らないのである」の意味である。

5) 結局第 3 編は「真の自己を知れ」という命令で終わっており、その命令に挫折することで第 4 篇の「宗教的要求」が自己に起こって来るのではないか、という解釈が司会者によって述べられた。人格の要求（命令）が「宗教的要求」という様に形を変えて自己に起こって来る。

6) 自己が有限であることは分かるが、その自己を「偽我」と呼んで、それを「殺し尽せ」とするのは危ない、西田は筆が滑ったのではないか、との意見が出された。それに対し人間は自分が「有限である」ということを本当に分かっているのか、人間は死を直視することができるのか、という問いが出された。それに対し「死の覚悟はある」という意見が出たが、ここで問題になっている死は「永遠の真生命（それは永遠に生き続けるということではなく、神の生命を生きることであり）」に対する「永遠の死」のことであるとされた。永遠の死とはキリスト教では復活の希望のない虚無のことであり、自己の存在が得られない有り方であり、これが地獄の火に喩えられるとされた。要するにそこには居れないということである。仏教でも地獄は孤独（「無所帰」帰るところがない、居場所がないということ：筆者追記）であるとされていることが紹介された。

筆者追記

私は有限である、凡夫である、ということを目にするが、本当に有限である、凡夫であるということは人間の立場で言えることではない。人間はどこまでも（無限に）自分を肯定し、ひとかどのものであると思いたいということから逃れることはできない（だから凡夫である、という言葉は主張する場合、その裏に自分が優れたものであるという意味を人間は必ず含ませないわけにはいかない）。その意味で人間はどこまでも自分の力を頼む。自分の力を信じている。しかしすべては崩れていく。無意味だ。虚しい。それでも自力をやめられない。あらゆる意味づけが無意味だということを知りながら意味づけをやめられない。どうにもならない。

偽我であることも同様だ。自分のことを本当に偽我だと思っている人はいない。そこには自分を偽我だとする自分がある。それは偽我ではない。そのように人間は自分を偽我であると思うことができない。しかしそうしたあり方は絶えず崩される。自らの偽我であることが明らかになる。それでも自分が真の自己であると思うことをやめられない。そうして自分の力で真の自己になろうとする。また崩れる。それが繰り返されるだけのことだ。

してみると偽我を殺し尽せ、真の自己を知れ、と言う命令も土台無理な命令である。それでも容赦なく命令は我々に突きつけられる。また自分が有限であることを覚悟せよ、という要求も人間は自分で叶えることはできない。どちらも我々を超えたところから起こって来る要求である。

我々に真の自己を知れと容赦なく命ずるその働きは、我々の苦しみや悲しみを通し、それを包み救い摂る働きでもある。我々の自力がどうにも立ち行かなくなった時、厳かな命令（要求）はそのまま絶望の内にある我々に「悲しみの衆生よ、我を頼め」という生命の要求に転ずる。それが「我々の自己がその相対的にして有限なることを覚悟すると共に、絶対無限の力に統一してこれによりて永遠の真生命を得んと欲するの要求」、すなわち「宗教的要求」である。

頑張っている人間は自分が苦しいことも悲しいことも受け入れることはしない。それを克服しようとする。人間にはそれしかできない。それでもどうにもならない。しかしその苦しみや悲しみを包んでくれる者がいることに気づくと、人間は自分が悲しんでいることを受け入れることができる。そうしてその者に自らを委ねることができる。

人間は罪を自分の力で赦したり、悲しみを自分の力で癒したりすることはできない。人間最大の苦しみである在所の苦しみ（無所帰）も自分で何とかするということではない。「帰る」というのは待っているものがあって初めて成立する。自分の力ではどうにもならない。

哲学的問い：人間がどうしても居れない所とはどこか？